

エジプト、コプトの服飾文化
—大学付属博物館における服飾収蔵品の自然科学的調査と教育的活用 2—
Egyptian and Coptic Costume Culture
—Research on the Educational Use and Scientific Analysis of Costumes Collected in
University Museums II—

岡田 宣世^{*1+}, 深津 裕子^{*2+}, 石井 美恵^{*3+}, 内藤 幸江^{*4+}
Nobuyo Okada^{*1+}, Yuko Fukatsu^{*2+}, Mie Ishii^{*3+} and Sachie Naito ^{*4+}

*1 女子美術大学研究所 東京都杉並区和田 1-49-8
Joshi University of Art and Design Research Institute
1-49-8 Wada Suginami-ku, Tokyo, Japan

*2 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所
Independent Administrative Institution National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

*3 女子美術大学大学院
Joshi University of Art and Design Graduate School

*4 女子美術大学美術館
Joshi University of Art and Design Museum

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: Our research aim is to understand the costume culture of so called “coptic” textiles and how artifacts may be used to enhance education at a university level. In our second year of the project, we visited major museum collections and universities with “coptic” textile collection in Japan, US and UK. We examined costume related artifacts and discussed issues such as object access and educational programs with curators, conservators and educators. Another aspect of our research aim is to contribute to the factual understanding of materials and techniques of the textiles. Scientific analysis on dyes was carried out on selected items owned by the Joshibi University of Art and Design. Part of the project result was presented at two conferences.

はじめに

本研究ではエジプトのローマ属領期からアラブ征服期(3世紀から12世紀頃)までの服飾品・文献・資料調査を国内外の研究機関で行い、情報を収集するとともに、自然科学的研究手法を併用し、制作技法を中心に資料の調査分析を行うことにより、コプトの服飾文化を明らかにすることを目的としている。

本年度は、昨年度の研究成果について、学会発表と機構内でのポスター発表を行った。また、調査は、頭被り・チュニック(貫頭衣)・マント・ズボン・靴下・サンダルなどの服飾形態の明確な完品や、織物道具類

1) embdry@venus.joshiabi.jp

を中心に行い、発掘記録および来歴を調べた。そして女子美術大学が所蔵するコプト服飾資料の素材に用いられた染料を明らかにするために、一部の資料に対する科学的分析を行った。また自然科学的調査のための研究会を開催し、外部講師から最近の科学的な分析調査の動向・分析機器の性能・材質調査の事例についての講義を受けた。

1. コプト服飾品の所在と先行研究に関する調査結果

エジプト王朝は紀元前 31 年にアクチウムの戦いでクレオパトラがローマ軍に敗れて滅亡し、エジプトはローマの属領となり、4 世紀頃までにキリスト教化が進む。619-628 年にササン朝ペルシャがエジプトを占領し、639 年にアラブの進軍を受け、661-750 年にウマイヤード朝、969-1171 年にファティミド朝に支配されイスラム教が広がる。「コプト」とはギリシャ語で Agigyptos/Aigyptioi「エジプト」[エジプト人]を意味し、キリスト教化したエジプト人またはその文化やコプト教会を指すが、いわゆる「コプト美術」は 3 世紀頃から 12 世紀頃のエジプトからの発掘品を総称するのが一般的である。最近ではコプト(Coptic)、ローマ・エジプト(Roman Egypt)、ビザンチン・エジプト(Byzantine Egypt)、イスラム・エジプト(Islamic Egypt)と文化的時代に従って称する傾向がある。

エジプトでは王朝期に行われた人体のミイラ化と服飾品を含む日用品の埋葬習慣は 3 世紀頃まで続けられ、ミイラ化が廃れた後も服飾品や日用品を埋葬する習慣が続けられた。遺品の大半は市街地の外に作られた砂漠の墓地から 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて発見されたもので、何世代もの墓が層をなしているために時代の異なる品が出土した。この時代は古代エジプト王家の墳墓が発見されるなど、熱狂的なエジプトブームが起こる。

染織品は、1884 年にアクミン(Akhmim)の 2-9 世紀のキリスト教墓地から大量に発掘され、砂漠の乾燥した環境で見事に保存されていたことで注目が集まった。白い亜麻の貫頭衣に肩に紫や紺の縦縞(クラヴィ Clavi)が織込まれたチュニックは、ローマ時代の壁画やモザイクに描かれている衣装や新約聖書の時代を彷彿させ、多色の色糸によるメダリオンには聖書の物語が織り込まれるなど、キリスト教の司教が着用する衣装の原型として注目された。チュニックは、肩・胸・裾に綴織りで文様が織りこまれたが、出土品で生地の状態が良くないためか、バラで売る方が利を得やすかったためか、文様だけを切り取られた断片が多く、服飾品の完品が非常に少ない。

主要な博物館における「コプト」染織品の収集は、英国のヴィクトリア&アルバート美術館(Victoria and Albert Museum)が 1886 年[1]、フランスのルーブル美術館(1884Musée du Louvre)が 1884 年[2]、ベルギーの王立歴史美術史博物館(Musées Royaux d'Art et Histoire)が 1887 年[3]、ロシアのエルミタージュ美術館(Hermitage Museum)が 1889 年、オーストリアのウイーン装飾美術館(Museum of Applied Arts,Vienna)が 1889 年[4]、ハンガリーのブタペスト装飾美術館(Budapest Museum of Applied Arts)が 1889 年[5]より、アメリカのメトロポリタン美術館(The Metropolitan Museum of Art)・ブルックリン美術館は 1890 年代に開始している。

これらの時期は、考古学的調査の黎明期で十分な記録が行われず、また美術市場が活況で盗掘も盛んに行われたために発掘情報が不明な遺物が多い。そのため、これまでの服飾品研究は装飾様式や織組織を中心に行われてきた[6-8]。1990 年代からは服飾品の炭素 14 年代測定[9,10]、染料分析[11-14]、発掘情報の見直しなど科学的な研究が進められているが、一部の事例報告に過ぎず全容は把握されていない。

2. 服飾品調査

【国内調査】

- ・ 遠山記念館 担当:岡田、内藤

日興証券の創立者遠山元一の蒐集品を所蔵する遠山記念館では、各国の染織品を多く所蔵しているが、その一部に「コプト裂」があり、所蔵分類項目のひとつとなっている[15]。今回は、服飾形態を推測できる作品と刺繍断片、計7点を選別して調査を実施し、「綴織・浮糸織人物・動物文様チュニック」(羊毛 6-7 世紀、110.5×220.0 cm)では、麻地の染料分析を実施した。このチュニックは織り出しから織り止まりまで、さらに両耳も確認できる作品であることから、コプトの織技法研究資料として貴重であると思われる。刺繍裂は、6-7 世紀は亜麻地に羊毛の刺繍糸、時代が下がると絹の刺繍糸が用いられており、昨年度の調査結果と一致した。しかし、刺繍裂と服飾品との関連性は見出せなかった。

【北米調査】 担当:深津

北米ではアメリカのメトロポリタン美術館、テキスタイル博物館、ブルックリン美術館、ニューヨーク大学、ボストン美術館、ロード・アイランド・スクール・オブ・デザイン(RISD)美術館、フィラデルフィア美術館、インディアナ美術館、サンディエゴ美術館などにおいてコプト服飾品が所蔵されていることがわかった。

- ・ テキスタイル博物館(米国、ワシントン DC) 担当:深津

20 世紀半ばに収集されたコプト服飾品の調査・保存・収蔵は 1980 年代に行われ、博物館の紀要に発表された[16]。

- ・ ニューヨーク大学アートコレクション(米国、ニューヨーク) 担当:深津

4 点のコプト服飾資料を所蔵する。いずれも断片であり、1900 年代に寄贈されたものだった。

- ・ メトロポリタン美術館(米国、ニューヨーク州) 担当:深津

約 2000 点におよぶコプト服飾資料を所蔵する。そのうちローマ属領時代(6-7 世紀頃)のチュニック 6 点を調査した。初期の収集品は寄贈品が多く、出土場所などの明らかな情報が確認された作品は限られていた。展示室では一部の大型チュニック・帽子・裂断片などが展示されていた。大型チュニックは着装形態が想起できるように、胴体内部に若干の詰め物がされ、傾斜付展示ケースに収められていた。大型作品は収蔵庫内の大型の引き出しに平置き状態で、一部を紙筒に巻いた状態で収蔵されていた。これらの展示・収蔵方法は、今後の国内での展示・収蔵のための参考となるだろう。また最新の染料分析の結果として、チュニック断片の紫毛糸に貝紫が使用されていたことが美術館紀要に発表された[17]。

【欧州調査】

- ・ ケンブリッジ大学フィツウィリアム博物館(英国、ケンブリッジ) 担当:石井

コプト服飾資料を約 300 点所蔵し、そのうち完品はローマ属領時代のチュニック 2 点、スプリングの頭被り、サンダル、紡錘車を調査した。初期の収集品には 1889 年のエジプト調査団の寄贈品が含まれる。

- ・ ロンドン大学ピトリ考古学博物館(英国、ロンドン) 担当:石井

ローマ属領期の製織道具、並びに、これらの発掘記録を調査した。

- ・ マンチェスター大学付属ワイト・ワース・アートギャラリー(英国、マンチェスター) 担当:石井

約 200 点の「コプト」服飾資料を所蔵する。ローマ属領時代のチュニックを調査した。

3. 素材の科学分析

女子美術大学が所蔵するコプト服飾資料のうち、3点から採取した5試料に対する染料分析調査を行った。染料分析は株式会社島津総合分析試験センター京都事業所に依頼し、HPLC-PDAによる定性分析を行った。その結果、6-7世紀頃のチュニック(1201.248)の狩猟人物文に用いられた紫色は茜とインジゴの重ね染め、薄赤色のチュニック(1201.3609)の地色に用いられた赤系色は茜染め、頭被りに用いられた赤系色は茜染めであることが判明した。

4. 研究成果の報告

文化財保存修復学会第31回大会(2009年6月13日 於:倉敷市芸文館)において、ポスター発表「エジプト・コプトの服飾文化—大学附属博物館における服飾収蔵品の自然科学的調査と研究的活用—」を行った。これは2008年度の研究成果である、女子美術大学美術館と文化服飾博物館が所蔵するコプト服飾資料に用いられた素材と製作技法の特徴、染料の簡易判定結果を示したものである。本研究が染織史・技法史に科学分析を加えた分野横断的研究であること、研究対象である女子美術大学所蔵品が国内外でも稀な所蔵点数であることから、研究成果に期待が寄せられた。

5. 研究会の開催

染織文化財の自然科学的調査の方法に関する研究会を行った(2010年1月16日 於文化ファッション研究機構内研究室)。講師に早川泰弘氏(東京文化財研究所)、高嶋美穂氏(国立西洋美術館)、吉田滯代氏(名古屋大学)を招き、文化財の材質分析法、最新の科学的分析法と分析機器について、各講師の分析に関わる事例報告などの講演ののち、ディスカッションを行った。自然科学的調査にはリスクや限度があるため、調査目的を明確にした上で実施することの重要性を再認識した。

結果と考察

国内で所蔵されるエジプト・コプトの服飾品の全容と服飾文化を把握するためには、国内外の資料を照合しながら、来歴・資料内容・科学的分析結果を含む素材と製作技法に関する詳細について明らかにする必要があると考える。とくに、これらが考古学的資料であることから、資料の発掘記録、副葬品の調査などが重要であることを海外調査で改めて認識した。その一方で、コプト服飾品に関する染織史・技法分析・染料分析などを総合的に行った研究事例は海外においてもほとんど見られないことから、本研究を実施する意義を認識することができた。

文献

1. A.F.Kendrick: *Victoria and Albert Museum Department of Textiles Catalogue of Textiles from Buring-Grounds in Egypt Vol. I-III*. London: His Majesty's Secretary Office (1920-22)
2. Pierre du Bourguet: *Musée National du Louvre Catalogue des Étoffes Copte I*. Paris: Musées Nationaux Ministère d'état – Affaires Culturelles (1964)
3. J.Lafontaine-Dosogne: *Textiles Coptes*. Bruxelles: Musée Royaux d'Art et d'Histoire (1988)
4. Peter Noever: *Fragile Remnants: Egyptian Textiles of Late Antiquity and Early Islam*, Vienna: Museum of Applied Arts (2005)

5. LászlóTörök: *Coptic Antiquities II*. Roma: L'Erma di Bretschneider (1993)
6. Baginski, Alisa and Amalia Tidhar: *Textiles from Egypt 4th - 13th Centuries CE*. Tel-Aviv: Tavinit Press (1980)
7. Trilling, James: *The Roman Heritage: Textiles from Egypt and the Eastern Mediterranean 300 to 600 AD*, The Textile Museum, Washington (1982)
8. Marie-Hélène, Rutschowskaya: *Coptic Fabrics*, Paris: Adam Biro (1990)
9. Mark van Strydonck, Klass vander Borg and Arie de Jong: The dating of Coptic textiles by radio carbon analysis, in Antoine de Moor ed.: *Coptic Textiles from Flemish Private Collections*, pp. 65-71, Zottegem: Provinciaal Archeologisch Museum van Zuid-Oost-Vlaanderen (1993).
10. Frances Pritchard: *Clothing Culture: Dress in Egypt in the First Millennium A.D.* Manchester: The Whitworth Art Gallery, University of Manchester (2006)
11. Jan Wouters: Dye analysis of Coptic textiles, in Antoine de Moor ed.: *Coptic Textiles from Flemish Private Collections*, pp. 53-57. Zottegem (1993).
12. Jan Wouters, Ina Vanden Berghem Ghislaine Richard, René Breinaux and Dominique Cardon: Dye analysis of selected textiles from three Roman sites in the Eastern Desert of Egypt: a hypothesis on the dyeing technology in Roman and Coptic Egypt, *Dyes in History and Archaeology* 21, p. 1-16 (2008).
13. Regina Hofmann-de Keijzer, Maarten R. van Bommel: Dyestuff analysis of two textile fragments from late antiquity, *Dyes in History and Archaeology* 21, p. 17-25 (2008).
14. Elena Phipps
15. 遠山記念館：遠山記念館所蔵品目録－Ⅱ 中近東・アフリカ・ヨーロッパ。財団法人遠山記念館(1992)。
16. James Trilling. The Roman Heritage. *Textile Museum Journal volume21*, The Textile Museum (1982) .
17. Elena Phipps: Cochineal Red: The Art History of Color. *The Metropolitan Museum of Art Bulletin winter 2010*. The Metropolitan Museum of Art, p. 9 (2010).



「綴織・浮糸織人物・動物文様チュニック」羊毛 6-7世紀、110.5×220.0 cm (遠山記念館所蔵)



「スプラング(髪覆い)」 羊毛 6-7 世紀、27.5×26.5 cm
(遠山記念館所蔵)



「綴織・浮糸織裂 鳥・動物・花文様(子供用チュニック)」
亜麻・羊毛 6-7 世紀、40.5×40.0 cm (遠山記念館所蔵)



研究会「文化財の自然科学的調査・分析について」 上;早川氏講演 下;吉田氏講演

